

# カルナの出生譚——注解(上)

小倉泰

一、

母子神信仰についてはすでに、対象を本邦に限ったものとして『桃太郎の誕生』、『妹の力』を初めとする柳田国男の諸研究があり、これらを踏まえた上で、視野を拡大して、その根源を古ユーラシアの地母神信仰に関わらせようと試みた石田英一郎の研究（『桃太郎の母』）がある。また欧米においても従来いくつかの研究が発表されているが、そうした研究の中では、本稿に訳出した「カルナ出生譚」と名付けられるべき挿話は注目されていない<sup>(1)</sup>。

梵語に親しんで未だ日の浅い筆者は、大叙事詩『マハーバータ』を通読するに至らず、この挿話の存在は、梵文学研究室の原実教授の御教示によって知りえたのであった。この挿話が、母子神信仰を考察するうえで、非常に興味深い要素を多々持ちつつ、なおかつ従来取り上げられなかったとすれば、原教授の言われるように、資料として知られていないと

いうことも、ひとつには言えるかもしれない。

母子神信仰自体は、複雑多岐かつ広範な問題を含み、小論の能くするところではなく、本稿では、母子神信仰に関する資料紹介として、その「カルナ出生譚」がいかなるものであるかを、原典に即して訳出し、後、いささかの考察を付することと満足しなければならぬ。（なお、訳文は、紙数の都合上、上下二回に分けて掲載する。）

二、

訳文を呈示する前に、まずカルナが、大叙事詩『マハーバータ』においていかなる地位を占めているかについて一言しなければならぬ。

聖仙ヴィヤーサには、ドリタラーシュトラとパインドゥウとヴィドラの三人の息子があつた。ドリタラーシュトラは盲目であつたため、弟のパインドゥウが王位についた。

盲目のドリタラーシュトラは、ガンダラー王の娘、ガンダラーと結婚し、百人の子をもうけたが、その長男をドゥリョーダナといった。一方パインドゥウは二人の女と結婚したが、一人はマドラ王シャリヤの妹マードリーで、ナクラとサハデーヴァの双生児を産み、また一人は、ヤーダヴァ王の娘ブリター、またの名をクンティといい、ユディシュトラ、アルジュナ、およびビーマの三人の息子を産んだ。

パインドゥウ王亡き後の、ドゥリタラーシュトラの息子たちと、パインドゥウの五王子との争いが『マハーバーラ』の根幹となるわけだが、ところで、このパインドゥウの五王子には、武勇に長けた兄がいた。これがカルナであり、母のプリターが未婚の時に、特別な方法で太陽神スリーヤから授かった子であった。

彼は、パインドゥウの五王子たちと母を同じくしながら、常に敵対し、大戦においてはドゥリョーダナの側について戦い、めざましい活躍をするが、やがて、アルジュナ王子によって悲劇的な最後をとげるのである<sup>(3)</sup>。

このカルナの出生について語られるのが、『マハーバーラ』第三巻林住の書である。

アルジュナ王子の側に立つ帝釈天は、彼らの将来を案じて、カルナを不敗たらしめている生得の耳輪と甲冑を奪い取ろうと画策する。そこへ彼の父、太陽神スリーヤが現われ、それ

らを帝釈天に渡せば自らの命を脅かすことになるかと警告し、もし、耳輪と甲冑を渡すなら、かわりに、帝釈天の槍をもらえと云う。(二八四―二八六)それに続いて、カルナの出生の秘密が語られる。以下、プーナ批判版によって訳出してみよう。(カッコは筆者が補った言葉であることを意味する)

## 二八七

ジャヤメーリヤ<sup>(4)</sup>は言った。

(1) 今、熱線もてる太陽が、カルナに教えなかった秘密とは何か。両の耳輪とはいかなるものか。また甲冑とはいかなるものか。

(2) 彼(カルナ)の耳輪と甲冑は、いかにして彼(カルナ)にもたらされしか。徳あるお方よ、私はそれを聞きたい。私に語られよ、偉大なる苦行者よ。

ヴァイシアンパーヤナは言った。

(3) 王よ、私は、太陽のその秘密を、そしてまた耳輪と甲冑がいかなるものであるかを、御身に申し上げましょう。

(4) 王よ、その昔、(ある)バラモンが、クンティボージャのところに行って来たのでございます。そのバラモンは、荒々しい性格で、あごひげを生やし、つえを持ち、髪は編んでおりました。

(5) (また)美しく、非の打ちどころのない肢体は、輝い

て、燃え上がるようでした。(肌は)蜂蜜の如き黄色、言葉は蜂蜜の如く甘く、苦行者の飾りと聖典の知識を身につけておりました。<sup>(5)</sup>

(6) その偉大な苦行者は、クンティボージャ王に申しました。「私は、汝の家で布施を求めたい。惜しむことなき人よ。」

(7) 「お前によって、また、お前の従者たちによって、私に不誠実なことが為されるべきではない。そう(守られれば)私はお前の家に住するであろう。もしお前が同意するならば。間然するところなき(王)よ。」

(8) 私は欲するままに出たり戻ったりするけれども、誰も私を怒らせるような(ふるまいをしては)ならない。それは、私が横になっていた、座っていたりする時もそうなのだ。王よ。」

(9) (それに対して)クンティボージャはこの好意あふれる言葉をもって、彼に答えたのでございます。「そのように、そしてそれ以上に(いたしましょう)」と。そしてまた、彼(王)は、彼(バラモン)に申しました。

(10) 「偉大なバラモンよ、私には、プリーターという名の美しい娘があります。彼女は貞淑かつ良き振舞いを備え、控えめでおごりのない、好ましい娘でございます。」

(11) 彼女は、尊敬をもって御身に仕えるでありますよ。

そして御身は、彼女の性格と振る舞いによって満足するでありますよ。」

(12) このように彼(バラモン)に語った後、彼(王)は、大きな眼をもつプリーターがはいつてきた時に、彼女に言ったのでございます。

(13) 「娘よ、この高貴なバラモンは、私の家に住むことを望んでおられる。そして私は、彼にそのことを約束したのだ。」

(14) 娘よ、お前を信じるところに、バラモンの満足があるだろう、と。だから、決して私の言葉を裏切らないでおくれ。」

(15) このバラモンは、尊い苦行者で、ヴェーダの学問に専心されている。この燦然たる威光をもたれる方が何をおっしゃっても、それは惜しまずに差し上げられるべきなのだ。」

(16) なぜなら、バラモンというものは最高の榮譽を持っているのだし、また最高の苦行を行っているのだから。バラモンたちが頂礼してくれるおかげで、太陽は空で輝いているのだよ。」

(17) 強大な修羅のヴァーターピー<sup>(6)</sup>も、敬意を表すべき人々(バラモン)を敬わなかったのだ、梵天の笏によって殺されたし、ターラジャンガもそうだったのだ。」

(18) 娘よ、これは、今や、お前に課せられた大変な仕事だ。お前は、常に専心して、このバラモンの喜ぶことを為すようにしなければいけない。

(19) 娘よ、私は子どもの中から、バラモンたち、また敬うべき人々すべてに対するお前のうやうやしい振舞いを知っている。

(20) またすべての召使いや、友人たち、親族たち、母たち、そして私に対しても、お前が、皆を尊重してきたことを。

(21) 町でも、館でも、ひとりとしてお前に不満を持っている者はいない。お前の欠けるところなき肢体（の美しさ）でもって、お前は召使いたちに対しても正しく行動している。

(22) だから私は、お前に、この短気な再生族（バラモン）を任せるべきだと考えるのだよ。プリターよ、お前は子どもの時に私の娘とされたのだ。

(23) お前は、グリシニー一族において、シニューラの愛らしい娘として生まれたのだよ。たいそう喜ばれたお父様が、御自分で私に下さった子どもなのだ。

(24) （お前は）ヴァースデーヴァの姉で、私の娘たちの中で一番年長だ。お父様が一番最初の子を私に約束されたのだから、お前は私の娘なのだよ。

(25) そのような一族に生まれ、（別の）一族において育て

られたお前は、池から池へ移るように、幸福から幸福へ移ったのだ。

(26) 特に、卑しい種族から生まれた女性は、（子どもの時に）幾分押さえられても、放逸な女に変わってしまうものなのだ。美しき女よ。

(27) プリターよ、お前は、王の一族での生まれと、素晴らしい容貌を、完璧に備えている。輝ける女よ。

(28) お前は、輝ける女よ、おごり、偽り、うぬぼれを捨て、恵みを与えてくれるバラモンを喜ばせようと努力するならば、幸福に結び合わされるだろう。プリターよ。

(29) そのようにすれば、美しい無垢の女よ、お前はきつと（何かを）得るだろう。けれども、最上のバラモンが怒った時には、私の一族はすべて焼き尽くされてしまうだろう。」

## 二八八

クンティーは言った。

(1) 「王よ、私は自制しつつ、バラモンを供養し、仕えましょう。お父様が御約束になられたように。王のなかの王よ、私は偽りでは申しません。」

(2) 再生族（バラモン）を供養するのは、私の本性よりくることでありますし、そのようにしてお父様を喜ばせるのは、私の無上の喜びなのです。

(3) もし聖人が、夕暮れにやって来ても、朝やって来ても、

真夜中やって来て、私に腹を立てることはないでしょう。

(4) 王のなかの王よ、お父様の御命令で、再生族を供養しながら、私がよき奉仕をするのは、人間たちの最勝者よ、私のためになることです。

(5) 御安心下さい。王のなかの王よ、最上のバラモンがお父様の家にいる間、軽んじられるということはないでしょう。私はこのことを真実として申し上げます。

(6) 私は、バラモンが喜ぶことを、そしてまたお父様のお役に立つことを為すようにいたします。間然するところなき王よ。お父様の心の熱が静まりますように。

(7) 大地の主よ、実に貴きバラモンというものは、供養された時には、(相手の)命を助けることができますし、そうでない時には、殺すことができますから。<sup>(13)</sup>

(8) このことを理解して、私は、(その)最勝の再生族を満足させましょう。王よ、(お父様は)私のためにバラモンから苦しみを得ることはないでしょう。

(9) 王のなかの王よ、なぜ(そう申し上げるのかという)なら、バラモンというものは、かつてチャヴァナがスカニヤーのために<sup>(14)</sup>そうあったように、侮辱された時には、王にも災厄をもたらすからです。

(10) 私は無上の自制心をもって、(その)偉大なバラモン

に仕えます。まさにお父様が、かのバラモンに語られた如くに、人間の中のインドラよ。」

王は言った。

(11) 「娘よ、ためらわれることなく、お前によってそのように為されるべきである。私のために、一族のために、そしてお前自身のために。」

ヴァイシアンパーヤナは言った。

(12) 栄光あるクンティボージャは、このように申しまして、子どもたちを愛してはいたのでございますが、娘のプリーターをそのバラモンに(召使いとして)与えたのでございます。

(13) 「バラモンよ、これは私の小さな娘です。何不自由なく育てられました。何か間違ったことをしでかしても、お気に留められることなきように。」

(14) 貴き再生族というものは、老人や子どもや苦行者には、除魔されても、常に怒りを押さえるものです。

(15) 過ちが大変に大きな時に(も)、バラモンによって、忍耐が為されるべきです。ですから、最勝のバラモンよ、(彼女の)できる限りの努力と供養をお受けとり下さい。」

(16) (そして)「よろしい」とバラモンによって言われた時、王は、喜びの心で、彼にハンサ鳥<sup>(16)</sup>か月のような(純白の)家を与えたのでございます。

(17) (また) 神聖な火を燃しておく場所には、彼のために美しい椅子を作らせ、そればかりか、食物を始めとして、すべてのものを与えたのでございます。

(18) 一方、王の娘のプリターは、怠惰な心も、自尊心も全く捨てて、バラモンを慰撫することに最高の努力をいたしました。

(19) プリターは、心を全く清めて、バラモンのところへ参りました。そして、神の如くに、(彼女の)奉仕にふさわしく値するバラモンを完全に満足せしめたのでございます。

## 二八九

ヴァイシアンパーヤナは言った。

(1) さて強大なる王よ、誓いに忠実なその娘は、純粹な心をもって、(これまた)誓いに忠実なバラモンを満足させたのでございます。

(2) ときおりバラモンは、朝やってくるとして、諸侯の王よ、晩や、あるいは夜にやって来たものでございます。

(3) そして、いかなる時間でも、その娘は常に、豊かな食物と、住居をもって、彼(バラモン)を供養したのでございます。

(4) 食物を始めとする捧げ物、そしてまた横になっている時や座っている時の奉仕、そうしたものは日に日に増し

ていって、足りないということがなかったのでございます。

(5) とがめられたり、あら探しをされたり、また、いやな言葉をかけられたりしても、プリターは、王よ、バラモンの気に入らぬことはしなかつたのでございます。

(6) バラモンは、違った時間に戻ってきたり、またしばしば、戻ってこなかったりもしたものでございました。そうして食物を見つけるのが難しい時でさえ、求めたりもしたのでございます。

(7) それでもプリターは、生徒の如く、息子の如く、また妹の如くに、大変行儀よく、「すべて準備できております」と彼に告げたものでございます。

(8) 王のなかの王よ、間然するところなきその娘は、彼の好みに従った諸々の努力によって、最勝の再生族の愛情を引き出したのでございます。

(9) 再生族の最勝者は、彼女の良き行動と、注意深さにと満足したのでございますが、彼女は、さらに最上の努力を続けていたのでございます。

(10) 朝にも晩にも、父は彼女に尋ねました。パーラタ族の後裔<sup>(19)</sup>よ。「娘よ、お前の奉仕によってバラモンは満足しているか」と。

(11) 「最高に(満足しています)」と、美しく輝ける乙女は、

彼に答えたものでございます。そして、偉大な心もてる  
クンティボージャは、無上の喜びを得たのでございます。

(12) そのようにして一年が過ぎた時、呪文を唱える者たちのなかでも最も優れた彼(バラモン)は、プリターのいかなる悪行も目にしなかった(ため、彼女に)好感を抱くようになったのでございます。

(13) 満足の心を抱いたバラモンは、彼女に申しました。「私はあなたの奉仕に全く満足している。美しき乙女よ。

(14) 高潔な女よ、さあ、願ひ事を、人間たちには得難い願ひ事をお選びなさい。それによってあなたは、すべての女性たちを榮華において陵駕するでしょう。」

クンティは言った。

(15) 「私はすべてを獲得いたしました。最もヴェーダに通暁する方よ、あなた様も父も満足いたしましたからには、バラモンよ、もう私の願ひ事はかなったのです。」

バラモンは言った。

(16) 「もし喜びのあまり、微笑みの美しい乙女よ、願ひ事を望まないならば、あなたは、神を呼び出すための呪文を受け取りなさい。」

(17) この呪文によって、あなたはどんな神でも呼び出せるだろう。そうして、どんな神でも、乙女よ、あなたの手中にはいるだろう。

(18) 望むと望まざるとにかかわらず、神はあなたに服従するであろう。そして呪文によって全く静められ、(あなたの)言葉に、召使いの如く身を屈するであろう。」

ヴァイシアンパーヤナは言った。

(19) そうすると、間然するところなき女は、バラモンの呪いを恐れて、二度までも、その優れたバラモン(の言うこと)を拒絶することはできなかったのでございます。王よ。

(20) そこでバラモンは、非の打ちどころのない肢体もてる彼女に、アタルヴァシラス<sup>(20)</sup>において聞かれる、数多くの呪文を与えたのでございます。

(21) それを与えると、諸侯の王よ、彼はクンティボージャに申しました。「王よ、私は、汝の家に心地良く住し、(汝の)娘によってよく仕えられ、またよく供養されもして満足した。もうこれで終わりにしよう。」と、このように言うと、彼はどこかにいなくなってしまう。

(22) 王は、バラモンがその場から消えたのを見て、驚きに満たされ、かつ、プリターを讀めたのでございます。

## 二九

ヴァイシアンパーヤナは言った。

(1) その最上の再生族が立ち去っていくらかの時が過ぎたとき、娘は、数多くの呪文の強さと弱さを考えたので

でございます。

(2) 「あの気高きおかたによって私に与えられたこれは、いったいどんなものだろう。私は、これらの呪文の力をすぐに試してみよう。」

(3) このように思慮しておりますと、突然、うら若き娘は、初潮が始まったことに気がついて恥しくなりました。<sup>(22)</sup>

(4) その時ブリターは、千の光線をもつ、輝く太陽が上りつつあるのを見たのでございます。けれども、彼女は、黎明に上る太陽の美しさには満足しなかったのです。

(5) 彼女の視覚は天的なものになり、そうして彼女は甲冑を身につけ、両の耳輪で飾られた姿の神<sup>(23)</sup>を目のあたりにしたのでございます。

(6) 彼女のなかで、呪文についての好奇心がおこりました。人民の主よ。そして輝ける乙女は、その神<sup>(24)</sup>を呼び出したのでございます。

(7) そして、氣息を清めて、彼女がスーリヤ<sup>(25)</sup>（太陽）を呼ぶと、スーリヤは、王よ、急いでやって来たのでございます。

(8) 彼は、蜂蜜の如き黄色の（肌）で、腕は巨大、首は貝の如き、笑っているかのような姿で、上腕には腕輪をつけ、冠を着し、空に火を放つが如くでありました。

(9) 彼は、ヨーガによって自らを二つに分けて到着し、輝

き続けたのでございます。そしてその場でクンティーに語りかけ、とても甘くささやきかけました。

(10) 「私は、美しき乙女よ、あなたの力のうちに、呪文の力によってやって来ました。為すすべなき私は何をしたらいいのでしょうか。言っして下さい、王女様よ。私はそれをあなたの為にするでしょう。」

クンティーは言った。

(11) 「お戻り下さい。神よ。あなたがやってきた場所へ。あなたは好奇心より呼ばれたのです。どうかお慈悲を、神よ。」と。

スーリヤは言った。

(12) 「私はあなたが言うように行ってしまう。細い腰もてる女よ、しかし、神を呼び出してにおいて無益に送り帰すのは正しいことではない。」

(13) あなたが考えているのは、愛らしき娘よ、太陽によって子が生まれるように、ということであり、かつまた、その子が、勇敢さによって世に並ぶ者なく、甲冑を着し、耳輪で飾られているように、ということである。

(14) だからあなたは自らを捧げなさい。象の如くに歩む女<sup>(26)</sup>よ。なぜなら、（あなたの）望むように、あなたの息子は生まれてくるだろうから。まろやかな肢体もてる女よ。

(15) さまなければ、私は行ってしまおう。乙女よ。あなた



と交わることなしに。美しき微笑みの女よ。私は、あなたを、バラモンを、そしてまたあなたの父を、呪いかつ怒るであらう。

(16) あなたによって為されたことのために、私は彼らを皆焼き尽してしまふだろう。それは疑いもない。そしてまた、あなたの悪い行いを知らない、あなたの愚かな父をも（焼き尽くすだろう）。

(17) そしてあなたのよき振る舞い（の意味）もわからずに、あなたに呪文を与えた、あのバラモンのために、私は、無上の修練を積み上げてやるだろう。

(18) 実に、帝釈天を始めとする天のすべての神々は、あなたによって欺かれた者（スーリヤ自身）を見るだろう。美しき乙女よ。彼らは笑っているかのようにではないか。

(19) 見よ。これらの神々たちを。あなたが私（の姿）を見た天眼は、私によって前もってあなたに与えられていたのだ。

ヴァイシアンパーヤナは言った。

(20) すると、王の娘は、三十柱の神々を見たのでございます。彼らは皆、自らの座でくつろいでおりました。そしてまた太陽の如く光り輝く、その力あり栄光ある神（28）を見ただのでございます。

(21) 彼らを見ると、うら若き乙女、女神は恥じ、かつ恐れ、

スーリアに言ったのでございます。「牛たちの主よ、御自分の座にお戻り下さい。私は純潔な娘であるために、（あなたが）欲望によって近づいてくるのが、苦痛なのです。

(22) 父、母、そしてその他の年長者たち、彼らが、（私の）この体を婿に引き渡す権利があるのです。私はこの世において人倫を犯すつもりはありません。体を守ることは、女性の徳行なのです。

(23) あなたは、私によって、幼稚さから、呪文の力を知るために呼ばれたのです。輝ける者よ。子どもなのだから」と考えて、私をどうかお許し下さい。太陽よ。」

スーリアは言った。

(24) 「子どもなのだから」と考えて、私は汝の嘆願を認めよう。しかし別の方はだめだ。自らを捧げよ。クンティの娘よ、そのようにすれば、汝の心は平静になるだろうから。憶病な娘よ。

(25) そしてまた、私が首尾よく（汝と）交われなければ、私は世間の笑いものとなるだろう。欠けるところなき肢体もてる乙女よ。私は、すべての賢者たちの語り草となるだろう。

(26) 汝は、私と交われ。汝は私に似た息子を得るだろう。そして汝は、すべての人々に卓越した者となるだろう。

輝ける女よ。」

二九一

ヴァイシアンパーヤナは言った。

- (1) その智恵多き娘は、様々に甘い言葉を言いながら、千の光線を有する（太陽）をなだめることができなかつたのでございます。
- (2) 暗闇の破壊者（太陽）を拒絶することができなかつたとき、その娘は、呪いのためおびえながらも、長い間、方策を考えただのでございます。
- (3) 「いったいどうしたら、私のために、罪のない父や、バラモンに対する呪いが、私たちに対して怒った太陽からの呪いがおこらないだろうか。
- (4) たとえ子どもによるものでも、テージャスとタパスは、<sup>(35)</sup>隠されていても、愚かさから性急に出し過ぎるべきではない。<sup>(36)</sup>
- (5) 今この私は、ひどく恐れ、そして荒々しく腕をつかまれている。（しかし）どうして私は、そうすべきでないのに、自らを捧げられようか。」
- (6) 肢体をとらえられたその娘は、このように呪いにおびえつつ、あれこれと考えながらも困惑し、（それでも）何度も何度もほほは笑んだのでございます。
- (7) 彼女は、親族たちのことを心配して、諸侯の王よ、そ

の神（スーリア）に申しました。呪いにおびえつつも、恥ずかしさによって乱されることのない言葉をもって、人民の主よ。

クンティーは言った。

- (8) 「神よ、私の父は存命です。母も、その他の親族たちも同じです。彼らが生きていくというのに、規範を越えることがあつてはなりません。
- (9) 神よ、あなたと私が、規範に反して伴寝をしたならば、この一族の、世における名声は消えてしまふでしょう。
- (10) しかし、あなたが、これが人倫だ、と考えるなら、<sup>(37)</sup>諸々の熱の最上なる者（太陽）よ、親族たちにより婿に渡されることなしに、私はあなたの望みをかなえましよう。
- (11) 見るに困難なる者<sup>(38)</sup>（太陽）よ、あなたのために自らを捧げても、私があなたにおいて徳を守れば、それは人倫です。広く聞こえ、名声ある、肉体を持つものたちの生命（太陽）よ。」
- (12) スーリアは言った。  
「汝の父も、母も、年長者たちもまた、そんな力はないのだ。明るく微笑む、美しい腰つきの女よ。<sup>(39)</sup>もしよければ、私の言葉を聞け。
- (13) 美しき女よ、<sup>(40)</sup> Kan、（欲する）という語根から、自由な娘を意味する Kanya、は作られる。それ故、娘は

すべてを欲するのである。<sup>(40)</sup> 美しき顔色の尻の形のよい乙女よ。

(14) 汝によって、人倫に反するいかなる行為も為されないだろう。まばゆい女よ。いったいどうして、人間たちへの愛を持つこの私が、人倫に背くことを為せようか。

(15) 素晴らしき女よ、すべての女も、男も、束縛されはしない。これが人間の自然で、そうでないのは、逸脱<sup>(41)</sup>であると言われている。

(16) 私と交わっても、汝は再び処女となるだろう。そして、強い力を持ち、偉大な名声を有する汝の息子が生まれるだろう。

クンティは言った。

(17) 「もし、あなたを父親として、私に息子が生まれるなら、すべての闇を除く者（太陽）よ、（その彼は）耳輪をつけ、甲冑をまとった勇士で、巨大な腕と、強大な力を有して（生まれてくる）ように。」<sup>(42)</sup>

スーリアは言った。

(18) 「（汝の息子は）大いなる腕を有し、耳輪をつけ、神々しいよろいをつけて生まれてくるだろう。乙女よ。そしてそれらは、アムリタ<sup>(43)</sup>から作られているだろう。」

クンティは言った。

(19) 「もし私の息子の非類なき甲冑がアムリタから作られ

るといふのなら、欲望をおこしたあなたは、彼を生ましめてください。

(20) 神よ、私と交わって下さい。あなたによって語られた如くに。そして、彼（息子）が、あなたの勇敢さ、美しさ、気概、活力、徳をもって生まれてくるように。」

スーリアは言った。

(21) 「両の耳輪は、アーディティ女神によって私に与えられたものである。心わななかせる女王よ。それらを、この非類なき甲冑とともに彼に与えよう。おびえる乙女よ。」

プリーターは言った。

(22) 「神よ、私はあなたと喜んで交わりましょう。もし息子があなたの言うように生まれてくるならば。牛たちの主よ。」

ヴァイシアンパーヤナは言った。

(23) すると空を行く者、かつラーフの敵（太陽）は、「よろしい」と言って、ヨーガに専心しつつ、クンティにはいり、へそに触れた<sup>(44)</sup>ので、ごぞいます。

(24) そうすると、その王女は、スーリアの輝きによって茫然となり、自失して、床に倒れ込んだので、ごぞいます。

スーリアは言った。

(25) 「美しき腰つきの乙女よ。私は為しとげてしまおう。

(そして) 汝は、すべての武器を持てる者どもの最勝者である息子を生むであろう。それから汝は、再び処女に戻るであろう。」

ヴァイシアンパーヤナ仙は言った。

(26) するとその娘は恥じらいながらスーリヤに申したのでございます。諸侯の王よ。「そのようにして下さい」とそれから、様々に輝ける者(太陽)は去ったのでございました。

(27) かくの如く語られて、クンティ王の愛娘、恥じらいつつも輝ける日輪めがけて懇願せり。しなやかなる手弱女は、困惑満たされ、打ち負かされし。心地よき床に倒れ込みぬ。

(28) 日輪は、輝きもて幻惑し、ヨーガにより彼女に入りて、肉体を支配せり。さりながら、処女性を奪うことなかりけり。かくの如くして娘は、再び正気に立ち戻れり。

(以下次号)

※このようにして太陽の子を宿したプリーター(クンティ)は、やがてカルナを産みおとすが、生まれたカルナがどのような運命をたどるかは、次号に譲ることにする。なお、注も一括して、次号に掲載する。